

チェスタトン『ブラウン神父』に見るキリスト教哲学(後半)

Christian Philosophy in 'Father Brown' by G. K. Chesterton, Part 2

山口 隆介

Yamaguchi Ryusuke

要 旨

本稿は、『ブラウン神父』シリーズに見出される G. K. チェスタトン (1874-1936) の思想を読み解く試みの後半である。

前半と同じく、短編集のもっとも普及している完訳版である創元推理文庫版に準拠した訳を用いることとした。各作品タイトルも同じくそれに準じるが、初出に限り原題も併載した。作品本文の訳は主に創元推理文庫版を参照しつつ筆者が新たに訳出した。

Key Words: チェスタトン ブラウン神父

3. 罪人と悔い改めた人々

3.1. フランボウ

ブラウン神父は、元来、あまり犯人逮捕に関心を示さないタイプの探偵役という印象を受ける。特に、雑誌連載時の第1シリーズ、第2シリーズとして1910年9月から1911年7月までの間に集中して書かれた『ブラウン神父の童心』*The Innocence of Father Brown* 収録作では、罪を犯してしまった犯人たちの霊魂の救済がブラウン神父の行動の主な動因になっている。

「青い十字架」*The Blue Cross* ではフランボウをヴァランタンに逮捕させたかに見えるが、これは自衛の結果であった。フランボウがらみの他の事件では、盗品を取り返した後は逃亡を許している。「見えない男」*The Invisible Man* は、神父が犯人と雪の中何時間も歩き続けたが、その話の内容が知れることはないだろうというところで終わる。「狂った形」*The Wrong Shape* は犯人の告白文を受け取って終わる。内容を絶対に秘密にすると誓って書かせた告白文なので神父が警察に伝えることはない。

「神の鉄槌」*The Hammer of God* では犯人自身に自首するかどうかを決めさせる。途中で犯罪捜査に口を出す場面があるが、無実の罪から人を救おうとの意図が伺われる状況

でのことである。「三つの兇器」**The Three Tools of Death**でも犯罪捜査に介入するが、やはり無実の罪から人を救うためである。

「アポロの眼」**The Eye of Apollo**では、犯人の悔悛を引き出すのに失敗するが、犯人が逃亡するのは止めようとししない。引き留めようとするフランボウに、行きたければ行かせようと言いさえる。その他、過去の罪を暴く話、そもそも犯罪がなかった話を除き、唯一の例外が「サラディン公の罪」**The Sins of Prince Saladine**である。サラディン公のあまりの邪悪さにブラウン神父もさじを投げ、悔悛を勧めることなくフランボウを促して即座に逃亡してしまう。

以後の作品もたまたま事件の関係者になってしまい、他の関係者を事件から解放するために解決に取り組む、自衛が犯人逮捕につながる、解決しても犯人の逃亡をゆるす、などのパターンが多い¹。ただし犯人の霊魂の救済への執着は、残念ながら『ブラウン神父の知恵』の時点ですでに前景に出てこなくなる。

ブラウン神父に救われた罪びとの例としてフランボウを取り上げてみたい。フランボウは、6フィート4インチ(約193cm)²もある長身かつ有名な怪盗で、初登場時は、ロンドンで行われる聖体大会³の混雑に乗じて宝石をあしらった十字架を狙い、正体を現した後は神父を愚弄するという、教会に敵意を持つ犯罪者として描かれている。

「奇妙な足音」**The Queer Feet**では富裕層のクラブから銀の食器を狙い、やはり、神父によって阻止される。神父によって「飛ぶ星」**The Flying Star**では大金持ちのダイヤモンドを奪取するというように、作中で描かれるフランボウの敵意は、富める教会と富める金持ちに集中している⁴。「飛ぶ星」の事件はフランボウの最後の犯罪でもあり、この作品でブラウン神父から悪の道は下り坂と諭されたフランボウはダイヤを返却して怪盗を引退し、以後は探偵となる。

フランボウについて特に語っておきたいことは、『ブラウン神父の童心』の作品収録順序と雑誌連載時の掲載順序は一致しておらず⁵、雑誌掲載順に読む場合と第1短編集収録順序で読む場合で、フランボウの役割変遷の印象が違うということである。次ページに短編集への収録順序と雑誌掲載順序を提示して比較を試みる⁶。

次ページの表を見れば分かるように、短編集収録順序では「飛ぶ星」でダイヤを返して引退し、次話「見えない男」**The Invisible Man**で再び読者の前に姿を現すのは探偵としてである。

しかし、雑誌掲載時の順序では「奇妙な足音」でフランボウは銀食器を返して姿を消し、

表 1. 『ブラウン神父の童心』所収作品でのフランボウの役割変遷対照表

短編集収録順序		雑誌 (Saturday Evening Post) 掲載順序	
青い十字架	神父から十字架を奪おうとし、逆に神父に見抜かれる。	青い十字架	神父から十字架を奪おうとし、逆に神父に見抜かれる。
(秘密の庭)	登場せず)	(秘密の庭)	登場せず)
奇妙な足跡	金持ちから銀食器を奪おうとし、神父に見つかり、止められる。	奇妙な足跡	金持ちから銀食器を奪おうとし、神父に見つかり、止められる。
飛ぶ星	金持ちからダイヤモンドを奪おうとし、神父に見抜かれ、諭されて引退する。	(神の鉄槌)	登場せず)
		狂った形	悔い改めた人物、神父の友人として登場。旧知の人物の殺害現場に居合わせる。
		折れた剣	英国の重要人物(故人)の罪を、ブラウン神父から教えられる。
見えない男	探偵フランボウとして登場。	見えない男	探偵フランボウとして登場。
イズレイル・ガウの誉れ	探偵として貴族の失踪を調査。	アポロの眼	ロマンスが始まらないうちに終わる。
狂った形	悔い改めた人物、神父の友人として登場。旧知の人物の殺害現場に居合わせる。		
サラディン公の罪	貴族に招待を受け、その貴族の悪事を目の当たりにする。	イズレイル・ガウの誉れ	探偵として貴族の失踪を調査。
(神の鉄槌)	登場せず)	サラディン公の罪	貴族に招待を受け、その貴族の悪事を目の当たりにする。
アポロの眼	ロマンスが始まらないうちに終わる。	飛ぶ星	金持ちからダイヤモンドを奪おうとし、神父に見抜かれ、諭されて引退したことを思い出として語る。
折れた剣	英国の重要人物(故人)の罪を、ブラウン神父から教えられる。	(三つの兇器)	登場せず)
(三つの兇器)	登場せず)		

第1シリーズ

第2シリーズ

「神の鉄槌」The Hammer of God 一話を挟んで「狂った形」The Wrong Shape で悔い改めた人物、神父の友人として再登場する（本作で神父はフランボウを「この世でただ一人

の友達」と呼ぶ⁷⁾。この作品内でフランボウが「悔い改めた」と言われているのは、雑誌掲載順に従うなら「奇妙な足音」での改悛を指しており、「飛ぶ星」での引退のことではない⁸⁾。

また、「狂った形」のうちには探偵 *detective* という語は一言も登場しない。短編集掲載順で読んだ場合、「狂った形」は「見えない男」「イズレイル・ガウの誉れ」*The Honor of Israel Gow* の後に掲載されるため、「狂った形」のフランボウは、たまたま探偵と呼ばれていないだけで読者にとっては探偵であるが、雑誌掲載順に読んだ場合は(つまり連載をリアルタイムで読んでいた読者にとっては)まだ探偵ではない。さらにその次の作品「折れた剣」*The Sign of the Broken Sword* でもフランボウは探偵とは一切呼ばれない。「折れた剣」末尾の *Editor's Note* には「新シリーズの第1話は近々掲載」と記されている⁹⁾。そして第2シリーズ劈頭を飾る「見えない男」でフランボウは探偵としてデビューするのである。

つまり、雑誌連載中の第1シリーズではフランボウは、盗賊そして悔い改めた神父の友人としてのみ登場する。「狂った形」と「折れた剣」は神父が見抜いた罪を暴くことなく沈黙を守るという話であり、そこに悔い改めた罪びとであるフランボウが、神父のただ1人の友として秘密を共有する。神父とフランボウの結びつきの強さを示す挿話である¹⁰⁾。

以上のようにフランボウは、悔い改めた以後、神父の唯一の友人として長く神父と付き合うことになる。悔い改めた罪びとに対して『ブラウン神父』の視点は極めて信頼に満ちたものである。

3.2. マイケル・ムーンシャイン

マイケル・ムーンシャイン *Michael Moonshine* は「顎ひげの二つある男」*The Man with Two Beard* に登場した赤い顎ひげをつけ角縁メガネをかけるという変装で活躍した宝石専門の大泥棒である。腕力はあるが、決して人を殺さないという義賊タイプで、物語は彼の出所後が新聞報道されたところから始まる。犯罪を計画しているやに思われたが、実はすでに悔い改めて、一介の養蜂家として暮らしていた。神父は彼の正体を知った上で彼をたずねていたが、彼と接触していて慰めを得ていたのはむしろ自分の方であると述べる。

“He was one of those great penitents who manage to make more out of penitence than others can make out of virtue.....it is I who went to him for comfort. It did me good to be near so good a man.....if ever a man went straight to heaven, it might be

he.....only a convicted thief has ever in this world heard that assurance: 'This night shalt thou be with Me in Paradise'¹¹.'¹²

「彼は、他の人が徳から作り出す以上のものを改悛から作り出すことに成功している偉大な改悛者の1人です……わたしの方こそ、彼のところになぐさめを求めて訪ねていたのです。あのよう善い人のそばにいてわたしも善くなりました……まっすぐ天国に行った人がこれまでいたとするなら、それは彼だと言っていい……有罪宣告を受けた泥棒だけが、これまでこの世での保証を聞いたのです。『今宵なんじは我とともに樂園にあるべし』」

まっすぐ天国に行った、ということは聖人であるということである。これも、悔い改めた罪人への信頼の厚さと言えよう。

3.3 虎のティローヌ

探偵フランボウは『ブラウン神父の知恵』までは登場するが、その後長らく探偵としては姿を見せなくなり、『ブラウン神父の醜聞』本来の最終作品だった「とけない問題」The Insoluble Problem でおおよそ21年ぶりに登場する¹³。同作に登場する盗賊は虎のティローヌ（タイガー・タイロン）Tiger Tylone である。教会の聖具を狙っており、初登場時のフランボウと対をなす存在と見なしうる。

探偵フランボウは聖ドロテア（創元推理文庫版では「聖ドロシー」。原文表記は St. Dorothy）の遺骨を納めた聖具を護送する任務を負い、聖職者や修道士の目の前で聖なるものを強奪しようとする企てを不敬と呼んで阻止しようとする¹⁴が、シリーズ最初の犯罪でフランボウはまさにその犯罪を実行しようとしていたのであった。おそらくこの箇所は、「青い十字架」を覚えている読者にとってフランボウとティローヌを対照させる演出でもあり、かつ、どの口があつてそんなことをというのか、というユーモアか、あるいは、第1作の時のことを思いだしますね、という回顧を裏に含む発言でもあるのだろう。

そもそも「とけない問題」自体が、「青い十字架」と対をなす一篇と見なせる。「青い十字架」はシリーズの最初の作品として雑誌への発表、短編集への収録順序、ともに一番初めである。「とけない問題」は、当初はシリーズ最後の短編集『ブラウン神父の醜聞』の最後に収録されていた¹⁵。「青い十字架」に登場する聖具はサファイヤをあしらった十字架であるのに対し、「とけない問題」に登場する聖骨器はルビーをちりばめている。青と赤と

いう色彩の対比がなされている¹⁶。この2つの話「青い十字架」と「とけない問題」が裏表の関係にあり、フランボウとティローヌもまた裏表の関係にあることが示唆される。

ティローヌの犯行を防ぐために聖骨器のある教会にフランボウとブラウン神父は向かうが、途中で殺人事件によって足止めを食う。だが、それは2人を引き留めておくためにティローヌの家族が仕組んだ偽装で、自然死した祖父を殺害された遺体に見せかけたものであった。そのためには彼の家族(妻と弟と庭師)の協力が不可欠であった。

ティローヌの妻は、聖画や聖像を無価値と見なしており、神の助けが遅いので性急に行動する(おそらくは社会的不正の是正に非合法手段、不道徳な手段を用いること。例えば聖骨器を盗むことなど)からと言って性急に行動する人を誰も非難できない、という哲学を語る¹⁷が、これはおそらくティローヌ自身の思想でもあろう。そしてこれは、教会の十字架を盗もうとし、この無限の宇宙では盗みが正当化される場合もあると語った初登場時のフランボウの哲学と重なる¹⁸。

やがて真相を見抜いたブラウン神父はフランボウを連れて偽りの殺人現場から離れ、聖骨器のある教会へと向かう。そして、フランボウはティローヌと、かつてのヴァランタンとフランボウのように敬意ある態度を示し合う。

かくて、かつて神を信じず、盗むことで世の中への怒りを表していた人間が合理的な宇宙の善と悪のありように立ち戻った後、かつての自分と同じ人間に向かい合った。そして、いよいよ『ブラウン神父』は大団円を迎える。

4. 薔薇と祝福、そして再び教会について

4.1 異なる生き方をする者どうしの愛

「青い十字架」冒頭と「とけない問題」末尾と比較すると、いずれも視覚的なイメージが豊かであり、かつまた、「青い十字架」冒頭は人間の営みを俯瞰する視点¹⁹から、「とけない問題」末尾は宇宙全体を見晴らす視点から描かれている、すなわち、いずれも、それぞれのレベルで包括的な認識を行う描写をしているという共通点がある。視覚的イメージが豊富なのは、チェスタトンがもともと画家志望であったことによる彼の文体上の特徴でもあるが、視点も共通することを考えると意識的に描写法の選択がなされたものと思われる。また、「青い十字架」冒頭が人間界の俯瞰であるのに対し、「とけない問題」末尾は宇宙という神秘、そしてその答えという、より根源的なものを浮かび上がらせている。そしてそれは『ブラウン神父』の最後にして初めて、カトリックの儀式が挙行される場面で

あり、祝福が宇宙を照らし出す様が描かれる。

「とけない問題」末尾には、ブラウン神父が虎のティローヌの家族を聖ドロテアと重ね合わせて考えている箇所があるが、その箇所の文章が、創元推理文庫版(中村保男訳)では、「聖ドロシーもまた異教徒の愛人を持っておられた。しかし、あの方はその男を征することも、その異教への信仰を打ち破ることもなかった。聖ドロシーは自由に、そして真理のために死んでいった。そして天国から愛人に薔薇を送りよこされた……」²⁰となっている。この箇所には、実は問題がある。当該箇所の原文は以下の通りである。

“St. Dorothy also had a Pagan lover; but he had not dominated her or destroyed her faith. She had died free and for the truth; and then had sent him roses from Paradise...”²¹

(聖ドロテアもまた異教徒の愛人を持っておられた。しかし、彼は彼女を支配することも、彼女の信仰を破壊することもなかった。彼女は自由に、そして真理のために死んでいった。そして天国から彼に薔薇を送られた²²) [下線は訳者すなわち筆者による]

ハヤカワ・ポケット・ミステリ版(村崎敏郎訳)では「聖ドロシーにも異教徒の愛人があったのだと、ブラウンは考えた。しかしこの愛人は彼女を自分の思うままにしたり、彼女の信仰を破滅させたりはしなかった。ドロシーは真理のために自由な気持ちで死んでいった。そしてやがて天国からその男にバラを送った……」²³と訳されており、原文に即した訳になっている。

なぜ、創元推理文庫版は主語と目的語が逆転しているのか。筆者には、翻訳者すなわち中村保男が敢えて読者に断ることなく施したテキストの修正、すなわち、チェスタトンが書き間違ったか、誤植が見落とされたかして、チェスタトンの本来の意図通りの文章になっていないと判断した上でなした行為のようにも思える。というのは、ハヤカワ・ポケット・ミステリ版すなわち村上敏郎訳より中村保男訳の方が作中事実に照応している面があるからである。つまり、ドロテアと愛人、ティローヌの妻とティローヌの性別が正確に対応するのである。

中村訳では聖ドロテアの位置にティローヌの妻が入り、異教徒の愛人である虎のティローヌを「征することも、その異教への信仰を打ち破ることもなかった」、そして、「天国から愛人に薔薇を送りよこ」すと考えたことになるが、原文通りの訳の場合は、ティローヌ

の妻が、泥棒である夫を支配して犯行を止めることも、夫の信念を打ち破ることもなかったとして異教徒の愛人に位置づけられる一方で、ティローヌが聖ドロテアの位置に入り、天国から妻にバラを贈ることになってしまう。

やはり、ティローヌの妻が聖ドロテアに位置づけられ、その結果として、ティローヌが異教徒に位置づけられるのがやはり自然と言えよう。バラを贈るのも、ティローヌの妻からティローヌへの愛のしるしとして送られるという図にしたいところである²⁴。

ただし、上述の議論は、聖ドロテアに当たるのが誰で、異教徒に当たるのは誰かに拘った場合に生じる。当該の原文におけるブラウン神父の真意すなわちチェスタトンの意図を、生き方の異なる者どうしの愛情の価値を示すことにあつたと見なすならどうであろうか。つまり、聖ドロテア、異教徒の愛人という個々人ではなく関係そのものを主題としていたなら、話は変わってくるだろう。「虎のティローヌと妻は、生き方は違うが愛し合っていた。だから相手の存在を認めた。相手のためにとつた行為は間違っている、愛そのものは誰にも否定できない」という意味になるであろう。その限りで原文通りの訳も、十分な豊かさを持っていると言える。

4.2 respectability と教会

さらに、ティローヌ一家に対して神父は「大勢のもっと社会的に恥ずかしくない人々に対する以上に希望を持ってさえた」²⁵。「社会的に恥ずかしくない」と訳した原語は **respectable** で **respectability** の関連語である。**respectability** とは、ヴィクトリア時代のイギリスで中流階級に形成された価値観およびアイデンティティ²⁶であり、世間体という価値基準に適っている生き方をしていることを指す。世間の目という権力に迎合することで自分自身世間という権力装置の一部になってしまうことでもあり、教会から脱した社会が、確たる教義がないまま「教権」化し生活を植民地化している現象とも言えるだろう。

respectable, respectability という語は『ブラウン神父』の中では複数のニュアンスで用いられている。肯定的でも否定的でもない、特に含みのない意味で用いられている **respectable, respectability** もあれば、肯定的な、すなわち例えば、「スコットランドの農民」などに見られる、世間に恥ずかしくない生き方をしているという誇りを示す語としても用いられる²⁷。

いっぽう否定的ニュアンスでも用いられており、「とけない問題」での用法はその否定的ニュアンスに属する。以下、『ブラウン神父』における否定的ニュアンスでの **respectable**

および *respectability* について検討するため、フランボウ周辺で語られる *respectable*, *respectability* という語の内実を見ていく。なぜ、フランボウ周辺かということ、フランボウは作中で明確に *respectable* とは言えない生活から *respectable* な生活に移ったことが描かれているキャラクターだからであり、かつ、『ブラウン神父』という作品の根幹にかかわる重要な議論がフランボウの周りで *respectable* という語を登場させてなされるからである。

まず、「サラディン公の罪」*The Sins of Prince Saradine* では、サラディン公からフランボウへの手紙の文面が説明されており、サラディン公はこう書き送っている。

“On the back of the card was written in French and in green ink: "If you ever retire and become respectable, come and see me.....”²⁸

「カードの裏面には、フランス語で、そして緑のインキでこう書いてあった。「もし今後、引退し *respectable* になられるなら、私に会いに来てください……」

すなわち、フランボウが盗賊稼業から足を洗い、社会規範の中に立ち返ることが *respectable* と呼ばれていることが分かる。このことは *respectable* の辞書的意味と合致する。

そして、引退後のフランボウ自身について *respectable* という語が用いられるのが、探偵すらも引退して悠々自適の生活を送っているフランボウの登場する「ブラウン神父の秘密」*The Secret of Father Brown* および「フランボウの秘密」*The Secret of Flambeau* である。

「ブラウン神父の秘密」では、フランボウの城の敷地とフランボウ自身について *respectable*, *respectability* という語が用いられる。

“.....the black vineyard and green stripes of kitchen garden covered a respectable square on the brown hillside.”²⁹

「……黒いぶどう畑と緑の縞をなす菜園が、茶色い丘の斜面に貼りついた *respectable* な四角形を覆っていた」

“.....and he seemed, to the American globe-trotter, the embodiment of that cult of a

sunny respectability and a temperate luxury,.....”³⁰

「……彼〔フランボウ〕は、アメリカ人の世界旅行者〔フランボウの客人チェイス氏〕には、太陽と輝く respectability と節度ある贅沢とに対するあの崇拜を体現する者に見えた……」

そして、この respectability の権化たるフランボウの respectable な城でブラウン神父は、例の「犯罪事件の謎を解き、犯人を指摘することができたのは、自分がその犯罪を犯したからだ」という議論を行う。罪を犯しうるということでは自分も犯罪者も同じであるという常識から罪と犯罪者を理解すべきであるとブラウン神父は論じ、その議論は「フランボウの秘密」にまで続くが、その中で『ブラウン神父』中で最も否定的なニュアンスで respectable という語が用いられるくぐりが見れる。

“The worldly man, who really lives only for this world and believes in no other, whose worldly success and pleasure are all he can ever snatch out of nothingness—that is the man who will really do anything, when he is in danger of losing the whole world and saving nothing. It is not the revolutionary man but the respectable man who would commit any crime—to save his respectability.”³¹

「この世的な人、すなわち、実際にこの世のためにのみ生きており、他の何もかも信じていない人、この世的な成功とこの世的な楽しみが、その人が無からひったくることのできるすべてという人——それこそが、その全世界を失い、何ひとつ保てない〔もしくは「手元に残るのは無だけ】という危険に陥った時、実際にどんなことでもするだろう人間です。それは革命的な人ではなく respectable な人です。そのような人は、どんな犯罪でも犯すでしょう———respectability を守るためだったら」

社会規範に適うということが単に世俗に適う、世に適うという事である時、respectable であるということは単なる虚栄に陥る。すなわち悪い意味での世間体となる。世間体以上のものを見出し得ない人間は、世間体を保つためには、犯罪すら犯してしまう。世間体以上の価値を知ろうとしないがゆえに。

そして、そこまではいかないにしても、犯罪者を自分とは別ものと扱うという意味で、自分が属する(と勝手に思い込んでいる)社会規範の外に一步も出てこない、言い換えるな

ら罪を犯してしまった弱者を本当の意味で自分と同じ人間と認めていないという意味で *respectable* な人々についても議論が及ぶ。議論の相手であるアメリカ人のチェイス氏は、犯罪者と自分が同類であるということを、あくまで犯罪を理解する一種の理論的な方法、すなわちそのような仮定に立てば犯罪を内的に理解できるという方法として理解しようとする。その長広舌の中に、われわれは自分たちの *respectability* やその他もろもろのことを自覚しつつ犯罪者を(劇中人物のごとく)論じているのであって、現実には犯罪を扱う人々がいる場所と、われわれがいる場所は違うと語る³²。そして、その言葉に対し、いよいよフランボウが以下のように応答する。

"I stole for twenty years with these two hands; I fled from the police on these two feet. I hope you will admit that my activities were practical. I hope you will admit that my judges and pursuers really had to deal with crime. Do you think I do not know all about their way of reprehending it? Have I not heard the sermons of the righteous and seen the cold stare of the respectable; have I not been lectured in the lofty and distant style, asked how it was possible for anyone to fall so low, told that no decent person could ever have dreamed of such depravity? Do you think all that ever did anything but make me laugh? Only my friend told me that he knew exactly why I stole; and I have never stolen since."³³

「わたしは、20年にわたってこの2本の手で盗み、2本の足で警察から逃げました。わたしの活動が实际的だったことは認めてくださると思います。わたしの裁判官や追及者が現実に犯罪を扱わなければならなかったことも認めてくださると思います。彼らがそれをとがめるやり方について、私がまったく知らないとお思いですか。正しい人 *righteous* の説論を聴き、*respectable* な人の冷たいまなざしを見なかったでしょうか。私は、高慢で分け隔ての「ある」やり方で教えを垂れられた経験がないでしょうか。お前が誰にせよ、どうしてそこまで落ちることができたのか、と聴かれなかったでしょうか。まともな人間 *decent person* ならそこまで墮落するなど夢にも思えないと言われなかったでしょうか。彼らがやったことすべて、わたしを笑わせる以外の何になったとお考えですか。わたしの友だけが、わたしがなぜ盗むのか正確に知っていると言いました。そして、それ以後、わたしは盗んでいません」

かくして『ブラウン神父』における否定的ニュアンスでの *respectable* および *respectability* の内実が明らかになる。それは上の引用で並置されている、すなわち関連付けられている *decent* の訳語を借りて「まともな」および「まともさ」とでも訳すことができる概念で、それは本来、肯定的な価値ではあるのだが、「まともさ」にだけ閉じこもり、「まとも」ならざるものと自らを分ける態度に終始してしまう恐れを絶えずはらんでいる。この側面が顕在化した時に、それは否定的に扱われるべきものとなる。世間をあるいは世を超える価値に導かれることも、そのような価値に自らを委ねることもない、ただ世間的にあるいはこの世的にまともであるだけのまともさというものが、否定的な *respectability* であると言えよう。「とけない問題」で言及された *respectable* はここまで明瞭に否定されるべき側面を顕在化させたニュアンスで述べられているわけではないが、そこに陥る恐れがあるものとして言及されているのは間違いないであろう。

そして、正しさもまた、おのれが正しいという事に満足するだけで正しくあれなかった人と自分を分け隔てる時、真の正しさから外れていくのである。

これらは教会論として語り直すことも可能である。教会もまた人間集団である以上、単なる世間に墮落する恐れがある共同体であることに変わりはないからである。

正しい人がおのれの正しさを確信するだけのサロンと化すなら、教会はもはや正しい教会とは言えない。まともな人がまともな人だけでまともなことをするというだけの集団になったなら、教会はもはやまともではない。正しくない人、まともでない人のところに出ていく教会でなければ教会ではない。

ブラウン神父は「ギデオン・ワイズの幽霊」*The Ghost of Gideon Wise* で司祭を攻撃していた社会主義者ジェイク・ハールケット *Jake Halket* についてこう述べる。

“He curses priests for failing (in his opinion) to defy the whole world for justice. Why should he expect them to defy the whole world for justice, unless he had already begun to assume they were—what they were?”³⁴

「彼が司祭を呪っているのは、(彼の意見では) 司祭たちが正義のために全世界を敵に回すということに失敗しているからです。なぜ、彼は司祭に、正義のために全世界を敵に回すことを期待しているのでしょうか。彼がすでに司祭というものが——司祭に他ならないということが見え始めていたのでなければ」

すなわち、司祭は、正義のため全世界を敵に回す存在であり、教会もまた本来そういう面を持っている。教皇フランシスコ³⁵の使徒的勸告『福音の喜び』*Evangelii Gaudium* 第49項にはこうある。

“I prefer a Church which is bruised, hurting and dirty because it has been out on the streets, rather than a Church which is unhealthy from being confined and from clinging to its own security. I do not want a Church concerned with being at the centre and which then ends by being caught up in a web of obsessions and procedures.”³⁶

「私は、通りに出ていったために打たれて傷を負い、汚れた教会のほうが、閉じこもっているため、自分自身の安全にしがみついているために不健康な教会よりも好きです。私は中心にいることに関心を持つがゆえに、強迫観念と手続きとの蜘蛛の巣にからめとられて終わる教会を望みません」

それゆえにブラウン神父は、罪びとを唯一の友と呼び、罪びとと雪の中何時間も語り合い、罪びとの悔悛になぐさめを得、罪びとの共犯となった家族たちに希望を見出すのである。

神父は、夫婦間、家族間の愛によるものだからと言ってティローヌ一家の罪を見逃しはしなかった。しかし、同時に、愛のなりふり構わなさには希望を見出した。教権化した世間に自分たちを明け渡した愛情生活でないことだけは確かだったと言えるからである。きっとブラウン神父は、ティローヌ一家の霊魂の救済のために働くことであろう。フランボウに対してそうしたように。

そして、青い十字架に始まり、聖ドロテアの遺骨を納めた赤いバラに終わる『ブラウン神父』の物語は次の言葉で締めくくられる。

“He raised his eyes and saw through the veil of incense smoke and of twinkling lights that Benediction was drawing to its end.....the great monstrance blazed against the darkness of the vaulted shadows, as it blazed against the black enigma of the universe. For some are convinced that this enigma also is an Insoluble Problem. And others have equal certitude that it has but one solution.”³⁷

「ブラウン神父が目を上げると、香の煙ときらめく光とのヴェールを通し、祝福の式³⁸が終わりに近づいているのが見えた……壮麗な顕示台³⁹が輝き、ヴォールト状の影また影

から成る闇を照らした。まるで、この宇宙の黒い謎を照らすように。なぜなら、ある人たちはこの謎もまたとけない問題であると確信しているからだ。そして、他の人たちは同じくらい確信を持って、解決が1つだけあると信じている」

同作のタイトルでもある「とけない問題」とは、まず、ティローヌの家族がブラウン神父とフランボウを引き留めるためにでっち上げた偽装殺人事件である。すべての証拠が、ありもしない真相へ探偵たちを誘い込むためのものである。宇宙の謎もまた「とけない問題」であるなら、宇宙のすべては何の意味もないまま仕掛けられた手がかりの大群であって、言わば、本稿前半で言及のあった「中心のない迷路」⁴⁰に等しい。我らの人生もただ無意味に翻弄されるだけのものとなる。ただ、ブラウン神父は信じている。そこには宇宙を超える真理という唯一の解決があると。

註

¹ 『ブラウン神父の童心』では神父は基本的に犯人に真相を語っている(あるいは語ったと推測できる状況にある)。犯人を無視して、捜査関係者や事件の関係者とのみ、事件の解決のために真相を語り合うという状況は後の作品ほど顕著になるが、初めのうちはそれほど見られない。この点に関して初期の作品での例外が「秘密の庭」*The Secret Garden* だが、その時もヴァランタンに告解させることが神父の関心事であることは明示されている。また、『ブラウン神父の不信』以降に多く見られるようになる、事件の関係者と真相を話すパターンでも、事件の解決のためというより、真相を知ることによって事件にまつわる迷信や誤った認識から解放されるためというものが多く、純粋に解決のために捜査関係者や事件の関係者とのみ話すというものとはやはり違うものであるように思える。

純粋に事件の解決のために捜査関係者や事件の関係者と話しているように見える話が集中的に表れるのが『ブラウン神父の醜聞』であり、中でも「手早いやつ」*The Quick One* は、全作品通じて唯一、ブラウン神父が捜査の指揮を執る作品でもある。そして筆者には、その他『ブラウン神父の秘密』の少数の作品および『ブラウン神父の醜聞』の多くの作品での、弁護士に事件の真相を話したり、警察官に事件の真相を話したり、事件を解決したがっている関係者に真相を話したりするなどして、犯人逮捕が確実な状況をこしらえあげているブラウン神父は、自衛のために警官を呼ぶ「青い十字架」*The Blue Cross* や「翼ある剣」*The Dagger with Wings* でも神父とすら異質であるように思える。筆者には、探偵小説の主人公臭くなったブラウン神父に見えるのである。

² ちなみにちくま版の解説(高沢治(2012))によれば、6フィート4インチ(約193cm)はチェスタトン自身の身長であるらしい。『ブラウン神父の無心』南條竹則・坂本あおい訳、ちくま文庫、2012年、p.370 参照。

³ ロンドンでの聖体大会は、史実では第19回聖体大会として、1908年9月8日から13日にかけて行われた(本作は1910年の執筆である)。この時以降2019年現在に至るまで、これが英国で行われた唯一の聖体大会である。

⁴ 前半 p.106 参照。

⁵ この点は、ハヤカワ文庫版の解説(新保博久(2016))、東京創元社2017年新装版解説(戸川安宣(2016))でも指摘されている。『ブラウン神父の無垢なる事件簿』田口俊樹訳、早川

書房, 2016年, p.424f.および『ブラウン神父の童心』中村保男訳, 電子書籍版, 東京創元社, 1982年, No.5071ff.参照。

⁶ 『ブラウン神父の童心』収録作は, 'Saturday Evening Post'以外に, 'Story-Teller'あるいは'Cassel'に掲載されたようだが, 'Story-Teller'および'Cassel'に当たることはできなかった。一番掲載が早かったのは'Saturday Evening Post'のようなので, 以下'Saturday Evening Post'への掲載について論じる。

⁷ Cf. The Penguin Complete Father Brown, London, 1981, p.99, "You are my only friend in the world."

⁸ 短編集収録順に読む読者にとって「狂った形」で言及される悔い改めは, 当然「飛ぶ星」での引退を指すことになる。

なお, 「飛ぶ星」が執筆された事情について, ハヤカワ文庫版の解説(新保博久(2016))では「終了間際に「飛ぶ星」を書いたのは, カッセル社からそろそろ単行本を纏める目途が立って, フランボーを改換させるのに「奇妙な足音」だけでは心許なく思えたのかも知れない」と推測している。

ただし, 「飛ぶ星」の事件は次話「折れた剣」(「木の葉を隠すには森の中」という有名なせりふの登場する作品)でも「本物のダイヤモンドは偽物のダイヤモンドの中に隠す(「飛ぶ星」でフランボウがとった犯行手口)ということですか」というフランボウのセリフと「過ぎ去ったことは過ぎ去ったこととしておきましょう」という神父のセリフの応酬によって予告されている。このセリフは雑誌掲載時から存在するため, 上記トリックをフランボウの犯罪として作品にする考えは, 第1シリーズ終了時点でチェスタトンの中にはあったのかもしれないが, 断言はできない。登場人物には共有されているが読者にはわからない「語られざる事件」というものは, 探偵小説における演出の1つだからである。

⁹ Cf. 'Saturday Evening Post' January 7, 1911, p.33: "Editor's Note This is the sixth of Mr. Chesterton's series of stories. The first of a new series will appear in an early number."

¹⁰ なお, 「狂った形」と「折れた剣」にはどちらにもあの世めぐりの雰囲気がある。「狂った形」では葉巻の火が「一束ウィル」Will o' the Wisp(創元推理文庫版(中村保男訳)では「鬼火」)すなわち天国にも地獄にも行けない亡者の光と譬えられ(Cf. The Penguin Complete Father Brown, London, 1981, p.692, ".....the doctor had gone strolling round the end of the conservatory; they could see his cigar like a will-o'-the-wisp"), かつ「この事件には, ねじれた, 醜い, 複雑な, 天国の扉のまっすぐな掛け金にも, 地獄の門のまっすぐな掛け金にもない何かがある」というように, 善悪の正常な秩序の外にあり, どこにも入れない種類の罪の存在が示唆される。

「折れた剣」は, 夜中に墓地からの道を歩くブラウン神父とフランボウの対話を中心とした話だが, 夜中に墓地からの道を歩くという状況, さらに, 対話の中でダンテが地獄の最深部コキュートスに閉じ込めた罪人が裏切りの罪を犯した者たちであることが言及されることで地獄めぐりの雰囲気が醸し出される。その道連れがフランボウであることも, 神父とフランボウのつながりの深さを感じさせる。

¹¹ ルカ 23:45. なお, 調べることができた限りで, この聖句の引用文にもっとも近いのは, ノア・ウェブスター限定改訳版 Noah Webster's 1833 Limited Revision of the ".....This day shalt thou be with me in paradise", ならびにドゥアイ・リームズ聖書 Douay-Rheims Bible の".....this day thou shalt be with me in paradise"である。

¹² The Penguin Complete Father Brown, London, 1981, p.494.

¹³ 引退後の姿は『ブラウン神父の秘密』に登場する。

¹⁴ Cf. o.c., p.692, "You can't allow a profane robbery like that to happen under your very nose." 「あなた〔ブラウン神父〕の鼻先でこんな不敬な強奪が起こるなんて許しておけないでしょう」

¹⁵ 後になって「とけない問題」の後に、チェスタトン死去の年 1936 年に執筆された「村の吸血鬼」*The Vampire of the Village* が追加収録された(その事情を反映してかペンギンブックス版ではナンバーを付けずに収録されている)が、作者の意識としては「とけない問題」こそが、ブラウン神父シリーズ全体を締めくくり、完成させる作品と意識して『ブラウン神父の醜聞』に収められたのであるまいかと筆者は考える。いわゆる最終回を思わせる文章で締めくくられているからである。

¹⁶ サファイヤとルビーは、どちらも同じコランダムという鉱物であることを考えると、コナン・ドイルの「青い紅玉」*The Adventure of the Blue Carbuncle* へのオマージュと見なすのはうがちすぎか。だが、「この世で一番重い罪」*The Worst Crime in the World* に登場するマスグレーブ *Musgrave* 准男爵家は「マスグレーブ家の議定書」*The Adventure of the Musgrave Ritual* へのオマージュであろうから、まったくないとも言い切れまい。

¹⁷ Cf. *The Penguin Complete Father Brown*, London, 1981, p.699: “Why don't they [holy pictures and statues] defend themselves, if they are what you say they are?..... God may be patient and Man impatient.....and suppose we like the impatience better. You call it sacrilege; but you can't stop it.”

¹⁸ 前半 p.106 参照。

¹⁹ Cf. *The Penguin Complete Father Brown*, London, 1981, p.9: “Between the silver ribbon of morning and the green glittering ribbon of sea, the boat touched Harwich and let loose a swarm of folk like flies, among whom the man we must follow was by no means conspicuous—nor wished to be.”

²⁰ 『ブラウン神父の醜聞』中村保男訳、電子書籍版、東京創元社、1982年、No.3668ff.

²¹ *The Penguin Complete Father Brown*, London, 1981, p.704.

²² なお、この箇所には翻訳の問題とは別に、もう1つの問題がある。それは、管見の限り、聖ドロテアことカイサレアの聖ドロテアに異教徒の愛人がいたという伝説を確認できないことである。伝説で聖ドロテアが果物と薔薇を送ったとされるのは、彼女の弁護に当たったテオフィルスという弁護士である。『カトリック聖人伝』第1巻(光明社、1938年)、p.159-60 参照。チェスタトンが異教徒の弁護士 a pagan lawyer を異教徒の愛人 a pagan lover と読み違えたのかもしれない(あるいはそのような誤植のある聖人伝を読んだのか)。ただ、さすがにこの語は lover でなければ、この箇所の文章が意味をなさなくなるであろう。

なお、この伝説では、テオフィルスもその後キリストを信じる者となり、殉教した。

²³ 『ブラウン神父の醜聞』村崎敏郎訳(早川書房、1957年)、p.213。

²⁴ また、中村保男訳は、キリスト者が、他の宗教の信者を支配せず、その信仰を妨害せず、しかも天国から祝福を送るというモデルが描かれていると理解することもできる。これは、21世紀に生きるキリスト者にとっては、新しい魅力的なモデルとも言える。しかし、これが中村訳の要因になったかどうかは定かではない。また、これが魅力的なら、異教徒がキリスト者の信仰を妨害せず、支配しないのも同じくらい魅力的であるはずで、そちらに目が向かないのはキリスト教的偏見と言われても仕方がない。

²⁵ Cf. *The Penguin Complete Father Brown*, London, 1981, p.703: “.....he was not by any means hopeless about Mr. Tyrone and his deplorable family; but rather more hopeful than he was for many more respectable people.”

²⁶ 『ブラウン神父』でも respectability が中流階級の価値観であることは明瞭に示されている。例えば、「奇妙な足音」*The Queer Feet* に登場する。上流階級ないし支配階級の人士——すなわち、働かなくても食べていける連中——の集まりと目すべき「真のすなどりびと 12人」*The Twelve True Fishermen* については、respectable という単語は一度も使われていない。金持ちであるが働かなければならない実業家や、貧乏だがせめて身なりはきちんとしようとしている人々、あるいは郊外の余裕のある暮らしをしている人々などが、respectable, respectably という語で形容されている。また、「フランボウの秘密」*The*

Secret of Flambeau で respectable という形容詞があてはめられるのは法律家であるが、これも高度な知的専門職として中流階級に属すると考えられる。

²⁷ O.c., p.79; p.618.

²⁸ O.c., p.104.

²⁹ O.c., p.461.

³⁰ O.c., p.462.

³¹ O.c., p.585.

³² Cf. o.c., p.587: "It's easy enough to theorize and take hypothetical cases; but we all know we're only talking in the air. Sitting here in M. Duroc's nice, comfortable house, conscious of our respectability and all the rest of it, it just gives us a theatrical thrill to talk about thieves and murderers and the mysteries of their souls. But the people who really have to deal with thieves and murderers have to deal with them differently. We are safe by the fireside; and we know the house is not on fire. We know there is not a criminal in the room."

「理論をつくりあげたり、具体的なケースを仮定するのは十分に容易い事です。しかし、われわれは皆、架空の話語り合っているにすぎないということも知っています。ここ、ムッシュー・デュロックの快適な家で腰かけ、われわれの respectability やその他もろもろのことを自覚し、窃盗犯や殺人犯、そして彼らの靈魂の謎について語り合うという劇場のようなスリルも受け取っています。しかし、現実に窃盗犯や殺人犯を扱う人々は違う仕方であらなければなりません。われわれは、炉辺にいて安全です。われわれは、この家に火が着いていないことを知っています。われわれは、この部屋に犯罪者がいないことを知っています」

³³ O.c., p.588.

³⁴ O.c., p.451.

³⁵ 教皇フランシスコ Papa Franciscus は 2020 年現在のローマ教皇。2013 年以来現職。教会改革に熱心であることが 2020 年現在定評になっている。2019 年 11 月 23~26 日来日し、それにともない Papa の日本での公式の訳語が従前の「法王」から「教皇」に変更された。

ネット上で歴史関係の活動をしており、別名義で宗教改革に関する著作があるロマーヌス氏の youtube における「雑談」の 21 分 20 秒前後~24 分 30 秒前後(<https://www.youtube.com/watch?v=ut8D8I3GWSI>, 2019 年 12 月 20 日閲覧)では、フランシスコは両親ともにイタリア人のイタリア系アルゼンチン人であるので、世界のカトリック人口の半数が暮らす南米出身かつイタリア系であることによる政治的妥協および選出時高齢ことにより中継ぎとして意図されたことが、選出時に力学として働いた可能性が指摘されている。

なお、上述の「雑談」では、マルティーニ枢機卿という別の有力な教皇候補が急進左派であったために忌避されたことも上記力学のベクトルの 1 つとしているが、ここで言及されているマルティーニ枢機卿が聖職者の婚姻や女性司祭に前向きだった Carlo Maria Martini(1927-2012)のことであるなら、彼はフランシスコが選出された教皇選挙の前年に死去している。

ただ、マルティーニが積極的だった女性司祭についてフランシスコは慎重であることを考えると、直近の過去にそういう急進的な人物がいたということが、「あの人物に比べれば……」という形でフランシスコの選出に有利にはたらいた可能性は十分にある。なお、聖職者の婚姻についてフランシスコは、マルティーニに比して慎重に言葉を選んでいる印象があるが、認識にそれほど違いはないと思われる。

³⁶ ヴァチカン Web サイトの使徒的勧告公開ページの当該文書当該項目 (http://w2.vatican.va/content/francesco/en/apost_exhortations/documents/papa-francesco_esortazione-ap_20131124_evangelii-gaudium.html#V.%E2%80%82A_mother_with_an_open_heart, 11 月 15 日閲覧)。訳文は『ブラウン神父』の訳文と同じく筆者による。

³⁷ The Penguin Complete Father Brown, London, 1981, p.704.

³⁸ 祝福の式と訳した原語 **Benediction** は通常降福式と訳されるが、今日の日本人カトリックの感覚では、降福式は聖体賛美式とも言われるように、キリストの聖体を賛美しつつ、聖体による祝福を受ける式である。原文は具体的な状況を詳しく記している文章でないが、おそらく聖遺物を顕示し、聖遺物による祝福を施すという式が行われていると解釈できるので、祝福の式と訳した(『カトリック大辞典』でも降福式は聖体による祝福の式とされている。『カトリック大辞典』Ⅱ巻、富山房、1942年、「降福式」の項目、pp.225f.参照)。聖遺物による祝福という事態も、現代の日本人カトリックの感覚からは馴染みがない事柄であるかもしれない。しかしながら、聖遺物を意味する **relic** と **benediction** を検索ワードとして **youtube** で検索すると、聖遺物で十字を切って祝福をいただく式もしくは場面と思しき動画が複数見つかる。

³⁹ 現代の日本人カトリックの感覚では聖体顕示台を連想すると考えられることから別の訳語にすることも考えたが、形状はおそらく台状だろうと考えられるため、やはり顕示台とした。なお、顕示台はもともと聖遺物の顕示器から発達した器具であるとのことである(前掲書、「顕示臺」の項目、pp.177f.参照)。

⁴⁰ 前半 p.107 参照。